

# 遣新羅使人歌の「月」と「雁」

―万葉に詠まれた博多湾一帯の和歌―

田中真理

『万葉集』巻十五の前半部には、遣新羅使の歌を中心とする計百四十五首が収載されている（遣新羅使人等歌群）。

目録によれば、この遣新羅使は、天平八年（七三六）六月に難波を出航した一団のこと（全二十七次のうち、第二十三次）である。彼らの旅は、苦難に満ちたものであったらしい。往路では、海難だけでなく伝染病にも苦しみ、ようやくたどり着いた新羅では、侮辱的な扱いをされたことが『続日本紀』の記事によって知られる。さらに、帰路では、大使の阿倍継麻呂が対馬で死亡し、副使の相伴三中也発病した。その結果、秋の帰国の予定は大幅に遅れ、ようやく翌年の正月に帰京したという（副使は三月）。

「遣新羅使人等歌群」は、実録に基づきながらも、第三者の手によって歌が一部追補され、のちに構成された歌々と見られる（1）。歌に繰り返し詠まれるのは、旅に在る身の辛い心情、また、日々暮る家郷への恋慕の情が中心であって、旅の具体的な苦難について

はない。伊藤博氏は、当該歌群が「心情的には「妹」、時間的には「秋」という表現上の主題を踏まえた行路の順を持つことを指摘している（2）。出発の際、「秋さらば相見むものを」（三五八一）と詠まれたように、「秋」は妻との再会が期待されていたときであった。しかし、往路の筑紫館に到着した段階で、彼らは約束の秋を迎えている。筑紫館到着後の歌の題詞には「悽惆」「悽愴」「悽噎」と悲嘆を表す語が見え（3）、また、筑紫館以降の歌には、複数の秋の景物が継続的に詠み込まれる点が注目される。本稿では、特に「月」と「雁」に焦点を当て、それらの表現が用いられた意図について述べてみたい。

ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来ましを（三六七二）

筑紫館の次の地、筑前国志摩郡韓亭で詠まれた歌六首の中の第四首である。「韓亭」は、福岡市西区宮浦一帯（現在、唐泊の地名が残

大舟にま梶しじ貫き海原を漕ぎ出て渡る月人をとこ（三六一一）

同じく「遣新羅使人等歌群」に収められ、彼らによって誦詠された柿本人麻呂の七夕歌である。月は、七夕の景物として、中国および『懐風藻』の七夕詩にも多く詠まれる。

「月人をとこ」とは、月の異名の一つで、月を擬人化した表現。なお、「柿本人麻呂歌集歌」には、「天の海」「月の船」（巻七・一〇六八）という表現も見える。遣新羅使人等は、天空の大海原を渡る「月人をとこ」に、自身をなぞらえて誦詠したのであろう。

歌の配列から察するに、この人麻呂歌は七月七日（旧暦）よりも前に誦詠されたと見られる。七夕当日の詠としては、筑紫館の歌の次に掲載される「七夕に天漢を仰ぎ観て、各所思を陳べて作る歌三首」（三六五六〜八）を挙げうる。そこから韓亭での歌に至るまで、月が題詞や歌に集中的に見える。三六七一番歌はそのうちの一首。「ぬばたまの夜渡る月にあらませば」は、船出の時を見極めるうえで月に意識が向かったという事情もあろうが、その直前に迎えた七夕と、七夕歌・詩への意識も関わって生み出された表現ではなかったか。

一方、その後に掲載された、筑前国志摩郡

引津亭、また、肥前国松浦郡の狛島亭（所在未詳、佐賀県唐津市神集島か）で詠まれた歌々には、月の表現は見えない。妻と交渉を持つことを希求する表現としては、雁の表現を指摘しうる。

天飛ぶや雁を使ひに得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ（三六七六、於引津亭）  
あしひきの山飛び越ゆる雁がねは都に行かば妹に逢ひて来ね（三三八七、於狛島亭）

引津亭での歌の「雁」は、『漢書』蘇武伝の、いわゆる雁信の故事に基づき、雁を使者に見立てた表現である。狛島亭での歌の「雁がね」は「雁」に同じ。明示されていないが、ここにも使者の意を見てよいかもかもしれない。二首は、韓亭での月の歌とやや近寄りを持つ。ただし、韓亭での歌は、自身が直接妻に逢うことを希求するのに対し、引津亭での歌は、妻の住む都へ手紙を送るために雁を使いを得たいと言い、さらに、狛島亭での歌は、雁を第三者になぞらえ、都に行ったら妻に逢ってきてほしいと願う点で差があるといえよう。

歌に詠まれる景物が「月」から「雁」へと交替することに加え、自身が妻に対して直接的な交渉を持つ表現から、間接的なものへ、さらに、自身の代替となる第三者に託す表現へと移行している。そのことは、当該歌群の



能古島から韓亭を望む／撮影・菅波正人氏

る、「亭」とは宿駅のこと。この歌の前後に、「船泊まりして三日を経ぬ」（三六六八題詞）、「風吹けば沖つ白波恐みと」（三六七三）とあり、海が荒れていて三日間停泊したことが知られる。『万葉集』において月を詠む歌は多いが、当該歌のように、自身が月であったら…と反実仮想を用いて妻に逢うことを希求する表現は珍しい。この歌の発想にあるいは関わったかと思われるのが、七夕歌・詩の月の表現である。

構成が意図的なものであることを窺わせる。

『万葉集』において、「月」と「雁」は、秋の天空に在る景物として同時に詠まれることが多い（4）。当該歌群においては、妻と交渉を持つことを希求する表現として詠まれ、その背後に中国文学の影響が考えられるという共通点を持つ。だが、韓亭、引津亭、狛島の歌へと進むにつれ、前者から後者へと景物が交替し、希求する内容が微妙に変化することは、遣新羅使人等が妻と交渉を持つことが、さらに困難になっていくことを示唆しているように。このように、当該歌群においては、景物の表現が、遣新羅使人等の日毎に深まる家郷への思いを際立たせる役割を果たしていると考えられる。

- (1) 吉井巖氏『萬葉集全注 卷第十五』（有斐閣、昭和六十三）、『萬葉集への視覚』（和泉書院、平成二）、伊藤博氏『萬葉集の歌群と配列下』（塙書房、平成四）参照。
- (2) 同（1）参照。
- (3) 平館英子氏『萬葉悲別歌の意匠』（塙書房、平成二十七）に指摘がある。
- (4) 巻九・一七〇一、巻十二・三二一、同・三二三四等。

たなか まり・九州産業大学 講師